

昨年度の総会報告

平成十三年年度の総会は、八月十一日(土)午後五時より、一宮平安殿で行われました。八回生・十六回生を中心として、総勢百九十一名の方々に集まっていたいただきました。また、ご多忙にもかかわらず、歴代の校長先生方をはじめ、懐かしい旧担任・副担任の先生方など多くの先生方にご来賓として出席いただきました。

総会では、平成十二年年度の事業報告・会計報告、役員改選、平成十三年年度の事業計画・予算案の審議と、例年どおり議事が滞りなく進められました。特に会計面では、多くの方に郵送料カンパをしていただき、重ねてお礼申し上げます。

懇親会の各テーブルでは、所狭しと師弟入り混じって旧交を温めることができました。話が盛り上がり名残り尽きないまま記念写真でお開きとなりました。

同窓会総会という、参加を尻込みされる方が多いようです。しかし、学年単位の同窓会も定着して、年々より多くの好評をいただいています。欠席された方が当日の評判を聞き、自分も参加すればよかつたと悔しがったという話をよく聞くようになりました。今年度は、ご案内にもあるように、十七回生の学年同窓会を計画しています。お誘い合わせのうえ、ぜひご参加下さいますようお願いいたします。



十六回生 学年同窓会

十六回生の学年同窓会が総会と並行して行われました。同窓生約六十名と、鹿野先生をはじめ恩師の先生方出席していただき、大変懐かしく楽しいひとときを過ごすことができました。思い出話に花が咲き、西高生だったあの頃にタイムスリップしたように笑い声が響いていました。

男性が少なかったのは残念でしたが、女性が多かったことで華やか(賑やか)な会となり、どれだけお喋りしても喋り足りない様子で名残りは尽きませんでした。今度はクラス会や部活動の集まりを、という声も上がっていましたので、その折にはみなさんよろしくお願いします。

(事務局 近藤)



東京支部会報告

三十二回生 柴田 高志

昨年の十二月八日(土)に毎年恒例の同窓会が行われました。西高からは入野先生と金子先生に來

ていただきました。入野先生はこの東京で行われる同窓会が大好きなようで、私は今回で3回目の参加なのですが、知る限りでは少なくともその時から毎回出席されています。同窓会の連絡が少し遅れ、社会人の方もおられるので都合がつかなかったりして、例年に比べ少人数でしたが、アットホームな雰囲気です。二次会まで楽しむことができました。毎回感じるのですが、年齢や学生だったり社会人だったりの違いはあっても、みんな西高の卒業生だからなのか、初めて会う人でも学生時代のことなどを話し、すごく親近感が感じられ盛り上がることができました。これは西高生ならではの結束力だと思えますが、年下の学生の方は本当に弟のような感じすらしました。懐かしい友達と会えることもこの同窓会の楽しみのひとつですが、学生がこんな気軽に社会人の方と色々な話ができることも得るものが多いよい機会であり、是非より多くの人に参加していただき盛り上げていきたいと思えます。次回はしっかりと連絡が行き届くように改善できればと考えています。今年も同窓会を予定していますので、より多くの卒業生のみなさまにお会いできることを楽しみにしています。

新任の山田先生からメッセージ

山田 裕先生

西高には、昭和五十九年四月に赴任し平成十三年三月までの十七年間お世話になりました。

三十四歳から五十一歳まで自分の教員生活の中でもっとも充実した時間を過ごさせてもらいました。

た。前半の学校群制度の八年間は、相手校に追いつき追い越すという目標のはっきりした時代で、教科指導には格別厳しいものが要求され、若い教員には学ぶものが多い時代でした。職員室には日本松先生や棚橋先生などそうそうたる顔ぶれの先輩の先生方がそろっておられ、柘植校長の含蓄に富んだ「講話」に生徒も教員も固唾を飲んで聞き入ったあの時代を今でも懐かしく思い出します。文武両道のモットーのもと、生徒一人一人を大切に、その人間的な成長を促しながら、県下に名だたる進学校としての誇りに満ちた教育がなされていきました。複合選抜制度に移行してからの九年間は、群時代に育てられた若い教員が「西高の精神」を継承しながら、「新しい西高の教育」をめざし保護者・生徒と一丸となって進学校としての道を模索した時代でした。様々な試行錯誤の上到達したスクール・アイデンティティーは、学校群時代よりもさらにきめ細かな教育を実践していく一方で、生徒に進路実現に伴う自己責任の自覚を促していくということものでした。移行期の五く六年間が一番厳しく辛い時代だったでしょう。あの時代に、西高は実に多くの「情熱」と「誠意」に溢れた先生方に恵まれました。そして、生徒もよく我々の期待に応え、真剣に学習に取り組む、真摯な生き様を見せてくれました。私にとつて、三月の卒業式はこうした子供達の成長を、特別な感慨をもって見送り何かしら誇らしげな気分させられる時でした。

ました。そして、生徒達が高い山を目指して真摯に努力するのであれば、我々教師もとことんつきあおうではないか。いつの頃からか、ごく自然に教師の口からこのような言葉が出る学校になりました。それを「西高の文化」という言い方をする人もあります。こうした先生方の努力の集積が、学校群の中でほとんど唯一大きな落ち込みもなく学校を維持させた原動力だったのではないのでしょうか。私にとつて、二度にわたつて学校を作りあげる節目の時代を西高で経験できたことが今となっては何よりのよろこびであります。一宮西高校が今後とも、県下でも有数の進学校として、生徒・保護者・地域の人々そして同窓生の皆さんから愛される学校として発展されていきますことを心より願っています。

西高での二十五年をふり返って

岩田 幸雄先生

私が西高に赴任したのは昭和五十二年で、学校群制度が始まって五年目のことでした。学校群制度とは地域の伝統校と比較的新しい学校が一括して生徒を募集し、合格者を均等に二分して互いに競い合うという制度です。戦前からの旧制中学を前身とする伝統校と同じ新入生を迎え、三年後には立派に卒業させるという責務が伝統校の一分校に課せられたのでした。誇らしさと同時にその重責を思うにつけ、当時の先生方の御苦労がしのべれます。

実際、学校群時代を通じて西高は地域の年配の方々から「分校」と呼ばれ続け、また高校入試の合格発表当日には西高に振り分けられた受験生が涙を流すという光景